

## 令和2年仕事始め式 式辞

明けましておめでとうございます。

新しい年の仕事を始めるにあたりまして、ご挨拶申し上げます。

今年のお正月は比較的穏やかな天候に恵まれたように思いましたが、皆さんにはどのように新しい年を迎えられましたでしょうか。

さて、本学ではこれまで、社会、地域のニーズに応えるべく全学的な組織の見直しを実施し、共通教養教育や各学部・研究科における専門教育の充実、様々な地域貢献人材の育成、大学入試改革、数理・データサイエンス教育の全学展開、各種特別副専攻プログラム等、教育の充実を図ってきました。さらに、「じげおこしプロジェクト」による県内自治体との組織対組織による地域貢献活動、たたらプロジェクトの推進、SDGsの行動指針の策定、ダイバーシティ推進研究環境実現イニシアティブ(牽引型)の採択によるダイバーシティ推進等、厳しい状況におきましても、部局や教職員が一体となった取り組みにより、本学における諸活動や機能が強化されていることに感謝申し上げます。

学長通信第4号においても述べましたが、中教審答申「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン」と、それを踏まえた「国立大学改革方針」に基づき、第4期中期目標期間を見据えた大学の将来構想等について各大学と文部科学省との徹底対話が今月から始まります。将来構想の詳細にわたる具体性の検討やデータ等のエビデンスの精密化を図り、対話に臨みたいと考えています。島根県における地域の文化、知、医療の中核としての機能を強化・充実し、地方創生に貢献することは本学の大きな使命です。ダイバーシティの環境実現に取り組み、グローバルスタンダードと地域貢献の両面を視野にいれた教育、研究、医療を通じ、国際的視野を持って現代的及び地域的課題に対して長期的に貢献できる人材の養成、国際的優位性を持ち、また、地域課題に立脚した研究の推進、そして、地域における産学官一体となった協力体制を強化・推進することによって、本学の強み、特色を一層明確化し、本学の持続的な発展を図り、そして、「地域に生き、世界に輝く大学」の実現を目指します。

本学の持続的な発展のための大きな課題として、経営体質の改善があります。概算要求における重点支援としての運営費交付金の配分において、各大学が定めた戦略毎のKPI等による評価と成果に係る共通指標による評価、およびそれらの運営費交付金の配分への反映については、評価の幅や対象額が拡大されてきており、年度ごとの運営費交付金の配分額が大きく変動する状況となっています。このような状況の中で安定的に大学運営を行うためには、上記評価への対応を適切に行うことが重要です。一方で、大学経営の運営費交付金への依存度を低めることも重要と考えています。運営費交付金を有効に活用するためにも、検定

料、授業料や外部研究資金、寄附金の獲得増加は不可欠です。受験生や入学生の確保、科研費、共同研究、受託研究や寄附金の獲得等の取組の強化を早急に図りたいと考えています。

昨年は開学 70 周年、そして、医学部附属病院の開院 40 周年という島根大学にとりまして節目の年でした。今年、法文学部、総合理工学部の前身であります旧制松江高校の開校 100 周年を迎えます。さらに、本学の歴史を顧みますと、教育学部のルーツである島根県小学校教員伝習所が設置されて(明治 8(1875)年 4 月)から 145 年が経ちます。すべての学部がそれぞれの時代において社会の要請に応え、その役割を果たすことにより、島根大学としての長い歴史と確固たる伝統を築き、今日の 6 学部、5 研究科を持つまでに発展してきました。一方、現代高等教育の課題への対応、優秀な学生の確保、大学院教育の拡充、学内グローバル化の推進、ダイバーシティの推進、経営体質の改善等様々な課題にも直面しています。これらの課題を解決し、さらに本学を発展していくためには、従前の思考や発想に囚われない大胆な発想の転換、革新的な考え方が必要です。先日の日本経済新聞の記事にオックスフォード大学のルイーザ・リチャードソン総長の言葉として「伝統はそれぞれの世代が新しい価値観を融合させ、引き継いでいくものである」とありました。島根大学におきましても、これまで培ってきました強固な伝統を礎に、新たな価値観や発想を創出し、融合させ、常に成長し続ける伝統として次世代に引き継いでいきたいと思ひます。そのために、今、私たちが何を行うことができるか、島根大学の未来を見据えながら、明るい未来の構築に対する責任を果たしていきたいと思ひます。

本年が、島根大学にとりまして、また、学生や教職員の皆様にとりまして良い年になりますよう祈念しまして、年頭の挨拶とします。

本年もよろしくお願ひします。

令和 2 年 1 月 6 日  
島根大学長 服部泰直